SELFISH★GIRL

ｙｔ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＥＬＦＩＳＨ★ＧＩＲＬ

【Ｎコード】
Ｎ７５８５Ｏ

【作者名】
ｙｔ

【あらすじ】
アンチリノア派の作者が、その昔妄想していたスコ×セルというカップリング作品。

ある日、セルフィに相談事を持ちかけられたスコール。公共の場で話すことはできないと恥じらう彼女を自室に招き、よくよく話を聞いてみると、それは付き合い始めたアーヴァインと自分との「初体験」に関する悩みだった。

単なる痴話喧嘩かと意に介さなかったスコールだったが、セルフィはとんでもない頼み事を健全な美男子スコールにするのだった。

「おいちょっと待て。もう一度順序立てて説明してくれないか？」
スコールはいかにも厄介ごとに首を突っ込んでしまったという表情だ。授業が終わった後、席を立とうとした彼に話し掛けてきたのは、髪の毛がくるりと力強くカールした少女。
「いやだからさ……今からちょっと付き合ってくんないかな～なんて」
「セルフィ、俺は一限から今までずっと寝ないで頑張って疲れてるんだ。また今度にしてくれ」
さっさと立ち上がろうとするが、服の裾を掴まれて無理矢理座らされる。
「何なんだよ！」
「後生や！　レアカード何でも一枚あげるさかい！」
ぴくりと反応してしまう自分が、少し情けなかった。スコールは仕方なく、イスに落ち着いてやる。
アルティミシアの事件が決着して以来、セルフィはガルバディアガーデンに所属する、アーヴァインと付き合っている。結構な遠距離カップルであった。スコールはというと、明言している訳ではないが、もう殆どリノアと付き合っているも同然だった。
だが、アーヴァインもリノアもバラムガーデンの生徒ではない。

ここで話し相手になってやれる男子生徒といえば、スコールだけだったのかも知れない。

「本当に何でもくれるんだろーな」

「あったり前やんか！」

嬉々とした表情で、セルフィは大きな愛らしい眼をくりくりと動かした。スコールは溜息をついて、肩をすくめる。

「ホラ、座ってやったぞ。だからもう一度説明してくれないか？」

「こここここじゃ嫌や！　スコールの部屋行こ！」

赤くなりながら関西弁でまくし立てる。相当地に戻っている様子だ。しかしさすがに、スコールは身を固くする。

「何でだよ。さっきは良く判らなかったけどちゃんと喋ったじゃないか」

「せ、せやけど……その……ぱぶりっくな場所ではちょっと」

スコールはこの上なく不快そうな眼でセルフィを見た。「な、何やねん！」憤慨するトラビア娘。あのマイペースなセルフィがここまで狼狽している姿を、スコールは初めて見た気がする。彼女の相談というものに、多少は興味が湧いてきた。

「わかったよ。でも、メシは出さないからな」

「え～」

「何だその反応は」

時刻を確認すると、午後四時四十五分。夕食にはまだ早いなと思いながら、スコールは立ち上がった。

彼女がここまで真剣に悩むとは、一体何の相談なのだろう。スコールは部屋の鍵を開ける。中に入ると、薄暗がりでハンガーにジャケットを掛ける。電気のスイッチを入れ、見慣れた部屋の無事を確認した。ふと、後ろを見る。「セルフィ？」気配がしなかったので不審に思ったのだが、案の定、彼女は部屋に入っていなかった。入り口で固まったままである。スカートの裾を握り締め、唇を噛みながら奇妙な表情のまま立ち尽くしていた。

「入れよ」
「え！？　あ、うん」

ぎしぎしと音が聞こえそうなほどぎくしゃくとした動きで、セルフィは何とか部屋の内部に侵入し、後ろ手でドアを閉めた。
姿がやけに小さく見える。
ピンときた。

「もしかして男の部屋に入ったことないのか？」
「うぅ」
「嘘だろ？　だってお前、アーヴァインと付き合ってるんだから部屋ぐらい――」
「は、入ったことはあるんよ！　そういう意味の、緊張じゃなくてサ」

関節が錆び付いたような不自然な動きである。スコールはますます不審そうな表情を浮かべるも、気を取り直してセルフィにイスを

用意してやる。「座れよ」促され、おずおずとイスに腰掛けるセルフィ。無駄話をするつもりなど毛頭ないスコールは、いきなり本題に入った。

「何の用なんだ？」

「ち、ちょっと待ってーな！　ココロの準備ってもんが……」

「ダメだ。いい加減に教えろ」

凄んでみせるスコールに気圧されたセルフィは、仕方なくきちんと座り直す。「あ、あのさ」申し訳なさそうなトーンで喋るセルフィの見たことのない表情に、スコールのペースが乱される。

「付き合うとさ、段階ってもんを踏むじゃん？」

先が想像出来ない切り出し方だったので、それが本題だと判るまでに少し時間が掛かった。

「……」

「あたしとアービンも、付き合い始めて結構時間が経ったワケで……手も繋いだし、デートもしたし、キスだって……」

「何だ？　ノロケ話か？」

慌てて手を振るセルフィ。

「ちょ、ちょっと待ってよ！　最後まで聞いとって！！」

ぶすっとした表情で、尚もセルフィを訝しげに見つめるスコール。はらはらしながら、セルフィは続ける。

「え、え～と、手も繋いで、デートもして、キスもしたカップルは、

次に何をすればいいでしょうか?!」
「は?」
「ほ、ほらぁ!　そこまでいったらもうスるしかないやん!」
「まあ、そーだな」
「そうっ!　もうスるしかないんよ!」

セルフィは何故か真っ赤になっている。まあ、大抵はそういった話題になれば話者の体温は上昇するものだ。それにしてもセルフィの変調振りは尋常ではない。すうっと汗が頬を伝い、彼女は慌ててそれを拭った。

「ハッキリ言えよ。アーヴァインとしたんだろ?」
「うぎゃ〜!」

何の躊躇いもなく口に出したスコールに飛びかかるようにイスから立ち上がったセルフィは、運悪く脚をもつれさせてしまい、思い切り顔面から床に倒れてしまった。それを冷ややかに見下ろすスコール。

「で?　それが何なんだ?」

セルフィは倒れたまま言う。

「まだ、してない」「は?」「てか途中でやめた」

どうやら、相当重傷のようだ。
深い溜息と共に、スコールはしゃがみ込んでセルフィの両脇に手を差し込むと、ぐいっと力を入れ、赤ん坊を立ち上がらせるときのように彼女を起こした。案の定、彼女はベソをかいている。

「何があった？」
「うぇ」

これまでにないくらいに優しいスコールの声に、セルフィの気持ちは緩んでしまった。口をへの字に曲げ、とんでもなく情けない顔で涙と鼻水を同時に流している。
夕食は遅くなりそうだなと、スコールは食材の買い出しに行く計画を闇に葬るのだった。

やっとセルフィが落ち着いた頃、時計の時針は既に三回転はしてしまっていた。それまでずっと待っていたスコールだったが、さすがに空腹に頭脳を浸食され始める。「何か、食うか？」冷蔵庫に何かあったかなと、彼は立つ。
ひやりとした冷気の中に、昨日作ったフルーツポンチ（！）がぽつんと鎮座していた。

「果物ばっかりだけど」
「蜂蜜」
「は？」

スコールが振り向くと、セルフィは沈鬱な表情のまま言った。

「蜂蜜いっぱい入れて」
「……」

隅に置いてあった蜂蜜を取ると、スコールは冷蔵庫を閉めた。

「おとといぐらいに、アービンちに行ったんだ」

唇まで綺麗に舐め取ってしまうと、もはやスコールの分のフルーツポンチは全て彼女の胃袋に葬られた。

後には、果物の果汁や蜂蜜が満ちた甘すぎる汁が残るのみ。スコールには、飲み干す勇気がなかった。

(腹減ったな)

「聞いてる？」

「聞いてるよ」

空腹を紛らわすため、スコールはセルフィの話に集中することにした。

「でさ、『あ～、ウチもとうとうなるようになるんや～』って思ってドキドキして……」

「したんだろ？」

「だ～もう！！　最後まで聞いてって！！」

話の腰を折られ、どこまで話したか考えながら、セルフィは口を開く。「わ～ん！！」いきなり、泣き出す。

手に負えない。スコールは頭を掻いた。

「アービンが襲ってきた〜〜！！」
「はぁ？」

どうにも安定しない精神状態らしいので、ぶつ切りの台詞から重要そうな単語を抜き出し、スコールは要約を作成した。

「とりあえず、してる最中に」
「してないっ！」
「はいはい。要するにスル直前になってビビってたらアーヴァインが我慢出来なくなって、襲いかかってきたから腹に一発入れて逃げてしばらく経って後悔して謝ろうとしたら、無視されてムカつくと」
「そんなにハッキリ言うことないやんか〜！！」

さめざめと泣き続けるセルフィ。
冗談じゃない。スコールは思った。下らない痴話喧嘩に、今自分は巻き込まれようとしている。こういう問題には手出しするべきではないとは思うのだが、生死を分かつ戦いを共有した仲間だ。そう簡単に見捨てる訳にはいかない。

「で、俺に何をしろって言うんだ？」

昔なら『壁にでも話してろよ』と冷淡に突き放していたところだ。自分も随分と丸くなったものだと、スコールはしみじみと思った。

「練習させて」

セルフィが何を言って、それが何を意味しているのか一度に理解出来なかったので、「練習？」尋ねた。

「何の？」
セルフィは指でスコールの顔の前の空間に、『１－１』の引き算の式を書いて見せた。
「……の！」
スコールの視界が、少しぼやけた。
「バカなこと言ってないで、さっさと仲直りすればいいだろ」
「だ、だって怖くて」
「アーヴァインが悪いんじゃないか。我慢出来ないなんて、発情期の雄ザルじゃあるまいし」
我ながら巧い喩えだとスコールは思った。だが、そんな余裕をかましていられるほど心中穏やかではない。
「大体そんな簡単に身体を許すもんじゃないだろう。余計嫌われるぞ？」
「ち、ちょっと待ってや！　ホントにするワケじゃないんよ！？あの……きっとスコールは女の人いっぱい知ってそうやと思ったから」
「聞き捨てならないな。それじゃ俺がまるで手当たり次第女に手を出しているみたいだ」
「違うのん？」
部分否定は出来るが、完全否定は出来なかった。
人との付き合いを極力避けてきたスコールであったが、彼ほどの美男子を世の女性が放っておくはずはない。女性経験は、決して少ない方ではなかった。

「それにしたって、俺には出来ない」
「リノアには内緒にしよ！　別に、そういう意味でするわけじゃないんだから！」

じゃあどういうわけだと思うスコールであったが、リノアへの慮りの問題ではないとも思った。

「何て言うかな、最初は誰だってそうだと思うぞ。セルフィが怖がるのも無理はない。アーヴァインもそれくらい……」

そこまで言って、スコールはふと疑念を抱いた。

（まさかアーヴァイン、あんなナンパ男なのに、まだ経験値なし？）

仮説が余りにも滑稽なので、笑わずにはいられない。妙な顔で、セルフィはスコールを見た。

「済まない。とにかく、初めてはそんなもんだって」

セルフィは至って真剣なのだから、何とか笑いを堪え、スコールは諭した。

「だから練習なんて要らないさ。徐々に慣れていけば、それで……」
「その間に、あたしアービンを殺してまうかも知れへんっ！」

真っ赤な顔を更に赤く染めて、セルフィは叫んだ。

「何？」
「アービン、実はあたしの身体あんまり触ってへんねん」

「どういう意味だ？」
「あたし……男の人に触られるのが、ダメやねん」
ごくりと唾を呑む。スコールは、更に聞いた。
「どう、なるんだ？」
「触られると、身体が勝手に動く」
「どうにもならないのか？」
「ならへん」
「……」
「……」
スコールは立ち上がり、テーブルの反対側に座っているセルフィの横に立った。
「？」
不思議そうな顔でスコールを見つめるセルフィ。
するといきなり、スコールの手がセルフィの肩に触れた。０．５秒後、スコールの脇腹の数センチ横を、セルフィの拳が唸りを上げて空振りした。普通の男なら、ミゾオチに直撃していたところである。
「手、繋いだって？」
「一瞬」
「キスもしたって？」
「頭突きしちゃった」
そうなることを知っていながら、アーヴァインは理性のタガを外してセルフィに襲いかかったのだろうか。

スコールは、アーヴァインのそうした一種の強靱な精神力（？）もしくは何らかの特殊な力（大部分は煩悩）に、ある種の畏敬の念を表さずには、いられなかった。

溜息という形で。

アーヴァインの乱暴な愛に対し、最初は明らかな怒りを覚えていたセルフィだったが、どうやら時間が経つごとに彼への謝罪の気持ちが膨れあがってきたということらしい。随分とコロコロ感情の変わる奴だと、スコールは思った。

「いいか、最初に言っとくけど、俺はお前に何の下心も持っちゃいないからな」

「わかってるって。スコールはリノア一筋だしね！」

リノアリノアと言われると閉口したくなるのだが、あながち的外れという訳でもなかったので、少し変な気分だ。

「えと、じゃ、まず何すんの？」

セルフィが尋ねた。スコールは拍子抜けしてしまう。

「俺が知るかよ。そっちが付き合って欲しいって言ってきたんじゃないか。大体、その奇妙な体質を改善する気なんだろうけど、それって俺に何発も殴られろって言ってると同じじゃないか？」

逆に問われ、セルフィはそれもそうかという表情で考え込んでしまった。とりあえず寝室に移動したものの、肝心のセルフィが何をするのか決めかねているのでは話にならない。

「よ、よぉし！　じゃあ、リノアにするみたいにして！」
「露骨な言い方はヤメロ」

頭痛がするのは、気のせいではないだろう。人助けと思って、自分を騙す。

「あのな、さっき本当にするのはナシって自分で言っただろ？」
「あっ、そっか！」
「どうするんだ？」

う～んう～んと知恵熱が出そうなほど考え込むセルフィを見かねて、スコールが言った。

「仕方ない。じゃあ、俺の質問に答えてくれ」
「しつもん？」

セルフィは首を傾げてスコールを見た。

「まず、キスはしていいかどうか教えてくれ」
「きっキス！！？　何でぇ！？」
「えっ？　いや、ちょっとその重要だから」

何故キスが重要なのか問われたことなどなかったスコールは、危うく本当のことを言いそうになった。

（出来るか出来ないかで、攻める方法が違ってくるんでな）
「い、いいよ！　だってもうしたし！」
「そうか。それじゃ次に、服は脱がしていいのか？」

真剣な顔でとてつもないことを喋るスコールに、セルフィは真っ赤になって叫ぶ。

「だだだ！！」
「ダメか。じゃ、半脱ぎくらいで勘弁してやるよ」
「は、ハンヌギ」

あさっての方角を向いて何かを考え込んでいるスコール。まるでこれから重要な任務にでも就くかのようだ。　一方のセルフィは、いつものスコールからは想像もつかないような台詞の数々に仰天し、背中を冷たくする。

「よし、まあこれくらいか」

何がこれくらいなのか。
キスと半脱ぎに何の関連性があるのか、セルフィには判らなかった。

「あ、そうだ。どこらへんまで触っていいんだ？」
「さ……サワル？」

立派なセクハラワードだ。発する相手が、真剣な表情のスコールでなく、にやついたオヤジなら。

「そ、そこらへん」
「了解、判った」

これ以上は馬の耳に念仏らしいので、スコールはそこで切った。
そして、唐突にベッドに登る。
ぎょっとして身体を固くするセルフィに向かって、スコールは表情を変えずに言った。

「別に暴れても構わないぞ」
「へ？」
「一種の荒療治だ。多少のダメージは、覚悟してる」

言葉の途中で、スコールが手を伸ばす。アーヴァインがいきなり太腿に触れてきた例が頭を掠め、びくりと痙攣した。
だが、スコールは違った。
まずそっと、セルフィの頬に触れる。『男＝我慢出来ない＝直接タッチ★』という式を刻んでいたセルフィは、このとき本当に感動してしまった。スコールの指の長さと、しっとりと湿った掌が妙に落ち着く。最初の接触部位の違いで、ここまで違うのかと思ってしまう。胸がきゅっと締め付けられるような感覚が襲う。
そして、彼女は既にスコールのミゾオチに沈んだ自らの拳を本当に恨んだ。スコールは眼を固く閉じ、眉間に皺を寄せて耐えているようだ。「ご、ごめん」謝ったセルフィに、スコールは首を振って『気にするな』というサインを送る。

だが、実際は大いに気にして欲しかった。伊達にアルティミシアとの最終決戦に臨んだ猛者ではない。凄まじい重さのパンチである。こんなものを喰らったのなら、アーヴァインは吹き飛んでしまっても無理はない。何故ならスコールは彼を余り戦闘メンバーに入れず、強化しなかったからだ。貧弱なボーヤのままだったのである。
逆に、セルフィは最後までスターティングメンバーだった。アーヴァインが勝てる訳がない。

思ったより骨が折れそうだ。ズキズキと痛む腹をさすり、スコールは一度身体を起こした。セルフィはドキドキしながら、じっとスコールの挙動を見つめている。何もかもが初めてなのだ。無理もない。

スコールは何かを口走った。次の瞬間、彼の身体を淡い光が覆う。その光の正体を知っているセルフィ、大いに怒る。

「プロテスかけるなんてぇ！！」
「何だよ」
「失礼やんか～！」

半泣き状態のセルフィ。

「もおいいっ！　そんなコトされてまで付き合って欲しくなんかないもんっ！！」

ベッドを立って、ずかずかと部屋を出ようとしたセルフィは、不意に腕を掴まれ、条件反射的なカウンターで反対の手を繰り出していた。しまったとは思ったのだが、もう遅いことも判っている。
だが、相手の方が一枚上手であった。そのパンチをいとも簡単に受け流すと、スコールはあっと言う間に身体を反転。
何が起こったか判らないうちに、セルフィは再びベッドの上に仰向けの状態で戻されてしまった。両腕はしっかりと掴まれて固定されているようで、ぴくりとも動かない。

「俺を甘く見るなよ」

顔の上で、スコールの声がした。まだライトは点灯しているので、表情はよく見えてしまう。それがいけなかった。

彼のこういうときの表情は、殺人的な魅力を宿してしまう。女性は一瞬にして身体の自由を奪われ、魔法にかかったかのように、ただ胸をときめかすだけの乙女へと変貌してしまう。
もちろん、セルフィも例に漏れず、骨抜きにされてしまった。そして、現在のシチュエーションに耐え難い羞恥を感じ、全てが見えてしまうように仕向けるライトの存在が我慢出来なくなった。

「たた、多分大丈夫だから……電気消して、スコール」

懇願するセルフィだったが、このまま自分のペースで進めたいスコールは応じない。

「やだね」
「なっ、何でぇ」

もう耳まで真っ赤になっている。完全に術中にはまったセルフィを、スコールは純粋に可愛いと思った。
もはや、彼女は何故こんなことをしているのか思い出すことが出来ない。当初の目的は忘れてしまった。

「きちんと反応を見ないといけないだろ？」
「いいよぉ見なくて。だからお願――」

セルフィの首筋を鋭い性感が走った。「ひぁ！」短い悲鳴を上げ、伸ばしていた脚をきゅっと曲げる。
首筋を唇でなぞり、そのまま彼女の首筋で囁くように言う。

「可愛い」
「〜っ！！」
「でも、もっと暴れてくれないと張り合いがないな」

挑発をするものの、この両手を自由にしてしまうとスコールの身体が危ない。かといってこのままでは進まない。
スコールは困ってしまった。

「ズルいよぉ」

セルフィは気付かない間に震えている。怖い。スコールが怖いのではなく、このまま自分がどうにかなってしまいそうで怖いのだ。しかも、その場面をスコールに見られてしまうかも知れないことが更なる恐怖を生む。
それはとてつもない背徳感を伴った。しかし同時に、好奇の気持ちが比例するように膨れあがっていく。自分がとんでもなく淫らな女になってしまったようで、自然と涙があふれそうになった。

セルフィの気持ちの揺らぎを見計らったように、スコールは意を決してまずは右手を解放した。予想通り、何も来ない。
ほっと胸を撫で下ろす。「ぐふっ！」甘かった。一瞬でミゾオチを抉られる。

「ご、ごめっ！」

スコールはすぐさま持ち直し、平静を装う。

「なかなか、いいパンチだ」

不敵な笑みを浮かべたスコールは、寝そべったセルフィの背中に腕を回した。「がは！」当然、一発もらう。
プロテスがなければ骨の何本かを持って行かれたところだ。

「た、多少は攻撃を抑える努力をして欲しいな」
「わ……わかってるけどぉ！」

熱に浮かされた思考回路では、理性で本能をコントロール出来ない。
何気なく放った言葉も、もう少し配慮を怠らなかったら、彼女も後悔はしなかっただろう。

「スコールのせいで、我慢出来ないんだもん」

意外という表情で固まっているスコールを見て、セルフィは初めて意味をはき違えられているかも知れないと思った。

「……ほほう」
「ち、違うもんっ！！」

一瞬だった。
ほんの僅かな時間で、スコールはセルフィの服の背中についたファスナーを下ろしてしまったのだ。余りの速さに、抵抗すら出来なかった。

「やぁっ！　脱がさないって約束……」
「脱がさないで、どう練習するんだ？」
「ちょっ！　スコール！！」

さも当然のように喋るスコール。このままでは本当に脱がされてしまうと、慌ててスコールの手を掴んで引きはがそうとする。「よし」すると、スコールが独りで納得したように頷いた。

「何とか第一関門は突破したみたいだな」

「え？」
「今俺は殴られてないぞ。セルフィも、俺の腕を掴んでる。とりあえず基本的な接触は平気になったろ」

言われてみれば。
セルフィは夢中になって気付かなかったが、確かに、今自分は男の人の身体に触れているが殴っていない。

「ほ、ほんとだ」
「要はどれだけ自然体でいられるかどうかだ。今はちょっとそういう感じじゃないけどな」
「や、やったぁ！」
「あ　と　は」

突然明かりが消え、辺りが闇に包まれた。仰天するセルフィに、スコールの声が降り注ぐ。

「これをどのくらいのレベルまで続けられるか、だな」
「えっ！？」

面食らうセルフィ。すると一瞬のうちに、彼女は上着を脱がされてしまった。見えないが、眼にも留まらぬ早業だ。
ばさりとどこかで音が聞こえた。上着が投げ捨てられたのだ。もはや『返して』などという願いは届くまい。

「気が変わった」
「！？」
「好きにさせてもらうぞ」
「なっ、何言うてんねんいきなり～ッ！！」

起き上がろうにも、どうやらスコールがしっかりと押さえつけているらしく、身体はぴくりとも動きはしない。
半狂乱になって逃れようと藻掻くセルフィの顔に、突然スコールが唇を寄せてきた。暗闇に慣れてきた眼がそれを察知すると、セルフィは無意識のうちに固く眼を閉ざしてしまった。

だが、それが余りにも優しいキスだったので、すぐにうっすらと眼を開いてしまった。

「あぅ」

彼女の額を直撃した悪魔のキス。汗が滲んできそうで、はらはらする。

「セルフィ」

悪魔の声がする。

「俺のこと嫌いか？」
「えぇ？！」

想像もつかない台詞に戸惑う。スコールは、暗がりでも宝石のように輝くその両眼でじっとセルフィを見つめた。
それが喩えようもないほどの衝撃となってセルフィに走った瞬間、彼女の身体に異変が起こる。

（な、何！？）

下半身が言うことを聞かない。

（や……何コレっ！！）

なおもスコールの攻めは続く。

「嫌いか？」

嫌いと答えれば、どうなるのだろう。また、その逆は？

もうどう答えればいいか判らなかった。下着とスカートだけという寒々しい格好なのに、烈火の如く燃え盛る体温が、彼女の思考能力を焼き尽くしていく。「……らい」熟れたトマトより赤くなった顔を向けていられず、眼を逸らして呟く。

「こ、こんな変なスコール、嫌いだもん」

驚くほど挑発的になっている自分に気付いていた。その言葉によって、スコールが自分に何をするのか試したかった。

また、それをされてもきっと抗えないであろう弱い自分への、これがささやかな抵抗であるようにも見えた。

「良かった」

「え？」

闇の中で、確かにスコールが微笑んだ。そして静かに、セルフィの首筋に唇を這わせる。

「ぅあっ！！」

甘い吐息が漏れた。

「もし好かれてたら、俺もさすがに良心が咎めるからな」

「あ……あっ」

ゆっくりと唇が降りていく。セルフィの首筋を伝い、鎖骨から胸元へ。

羽毛でくすぐられるような快感がセルフィの前進を駆け巡っていく。凶悪な唇である。もはや人間のものとは思えなかった。先ほどまで少しは存在した羞恥心が、どんどん掻き消されていくような気持ちになる。女を操り人形に変える能力が備わっているようだ。

耐えきれなくなったセルフィの身体が少し弓なりに仰け反る。くすりと笑うスコール。それが聞こえたセルフィの頭が真っ白になった。もう少し、いじめてみる。

「好きか？　こういうの」

「やっ、あ……」

どうやら、作戦は上手くいったようだ。スコールは内心、いつ彼女の拳が顔にめりこむかとビクビクしていた。

速攻で目的を果たそうと、彼は背中に回した右手をそっと動かした。すると、驚くほど簡単に下着のホックが外れてしまったのだ。どうして暗闇で正確にそれが可能なのか、セルフィには理解出来なかった。もはや慣れているとしか思えないではないか。

少しだけ理性を取り戻したセルフィは、さすがに反撃に出る。

「あかんて！　これ以上はダメっ！！」

「どうして？」

「ほ、ホンマにするんはナシって約束やんか！！」

既に、彼女のブラジャーはその胸に被っている布きれに過ぎない。もしスコールが息を吹きかけでもすれば、たちまちずれてしまいそうである。

「それも、そうだな」
「！？」

呆気なく退くスコールに、セルフィは拍子抜けしてしまった。

「悪い。少し調子に乗りすぎた」
「えっ？　えっ？」

そこで、”物足りなさ”を感じている自分に愕然とする。これ以上は、本当にまずい。何故なら、襲い来る性感の波に対する防波堤が決壊寸前であることを、彼女は悟っていたからだ。一度身体が許してしまえば、あとは野となれ山となれ。

スコールの思うがまま、快楽の赴くまま蹂躙を受け入れてしまうに違いない。喜びすら伴って。

それだけはいけない。自分はアーヴァインを愛している。そもそも、これは彼のための行為ではないか。

想いを遂げられなかったあのときの切なさを雪ぐため、来るべきそのときを快く迎えるために、スコールに頼み込んだのだ。それが、ただ快楽を貪るだけの行為になろうとしている。それを許してしまいそうな自分が怖い。ほとんど裸も同然の身体を晒し、めくるめく悦楽に身を委ねている。

ここで踏みとどまらなければ、自分は絶対に後悔する。

頭はそう思っていた。アーヴァインに対する愛を忘れることのない、彼女の心はそう危険信号を送り続けているのだ。

頭で考えることと、身体の反応は必ずしも一致しないのだが。

（〜〜っ！！）

下腹部がむずむずする。じっとりと湿り気を帯びた背中がベッドのシーツに張り付くようで気持ちが悪い。

先ほどから落ち着かない心臓が、何かを求めて狂ったように血液を循環させている。闇の中でじっと息を殺しているつもりなのに、彼女の息は荒々しく辺りの空気を伝い、スコールの耳へと届いた。

「どうした？」

その声で、セルフィは全てを悟った。

それを知ったところでもうどうすることも出来ない。最初から、彼に弄ばれていたのだから。

今スコールは薄く笑みを浮かべながら自分を見下ろしているのだろう。とてつもなく悔しかった。恥ずかしすぎて涙が溢れそうになる。だが、本当にどうしようもない。何か変なものが、身体の最奥から出てくる。眼に見えない何かが。

「ぅ……く……はぁっ」

スカートを脱がそうと、中に侵入してきたスコールの手が少し触れただけだ。

腰の下の方を軽く擦っただけなのに、そこに稲妻のような性感が走った。

先ほどとは違う、艶めかしい喘ぎ声を漏らすセルフィ。

触れて欲しくない。それ以上、手を動かして欲しくない。下へ降りてきて欲しくない。

スコールの魅力によって、悔しいほど、そして切ないほどに”女”が滲み出た、そこには触れて欲しくなかった。

「どうする？」
「……」
涙が溢れた。もう、答えはたった一つしか思い浮かばない。愛しい人の影が、セルフィから消えかける。
それにも構わず、スコールは残酷な問いを投げかける。
「いじ……わる」
セルフィの荒々しい呼吸が響く。固く閉ざした両脚から力が抜けていく。桜色に上気した頬。
全ての準備が、遂に整ってしまった。
来て欲しい。
続けて欲しい。
めちゃくちゃにして、欲しい。
どうにかして身体の熱を取り去って欲しい。
そして、自分の熱を、感じて欲しい。
スコールが、欲しい。
「……もっ――」
「いや～！　ごめんっ！！　よく頑張ったなセルフィ！　ちょっと悪ノリが過ぎたよな！！」
「……と」
セルフィの言葉と同時に、スコールの身体が離れた。すると、それまで場を支配していたあの熱が一気に奪われる。
自分とスコールを繋いでいた甘い熱を帯びた空気を全て持って行

かれ、セルフィは何も口に出すことが出来ない。
ぽかんと、そこにいるであろうスコールを見つめる。
「とまあ、こんな感じだ。アーヴァインの奴が俺と同じようにするかどうかは判らないけど、これ以上の攻めは他にはないぜ？　自慢じゃないけどな。だからもう大丈夫だよ。何が来ても、セルフィは殴ったり蹴ったり頭突きしたりするようなことはない。現に、今そうだったからな」
ぱさりと毛布をセルフィに投げ、スコールは立ち上がって、あろうことか照明を点けてしまったのだ。
それまで部屋に充溢していたどろどろとした粘着質のムードが、一瞬で無機質な白い光に流されてしまった。
セルフィは毛布に包まれた自分の身体を覗き込んでみた。すうっと、汗が一筋胸へ流れる。もちろん、ブラは完全に下へ落ちてしまっていた。何より致命的だったのは、疼く下腹部が未だスコールを求めていたことだった。
「俺も危なかったよ。もう少しで自制をなくすとこだったからな。ここから先は俺の出る幕じゃないだろ。あとはふたりがどう仲直りして、ここまで持ってくかの問題――」
「何でや」
冷めていく。高ぶりに高ぶった欲望が急激に冷凍され、膨張していく。
「は？」
スコールは振り向く。

「何でやねんッ！！」

涙を浮かべながら、セルフィはスコールを睨んだ。ぎくりと、背中に冷たいものを感じる。

「セ、セルフィ？」

沸々とこみ上げるのは、怒気。中途半端（彼女からすれば臨界点）まで刺激された彼女の性が、スコールを許さない。ごそごそと下着を拾い上げて装着し、スカートを履き直す。するとセルフィは、ベッドから降りて一歩一歩怨みを込めながら自分の覚悟を踏みにじった鬼畜男へと近付いていった。

「お、おい」

「せ、せっかく流されようって決めたのに……しようって決めたのに……決めたのにッ！！」

「さっきと言ってること違う――」

「うるさ～～～～～～いっ！！」

顔を真っ赤に染め、乱れた髪の毛に構わず、ゾンビの足取りでセルフィは接近する。

「お、落ち着けって！　何怒ってんだよ！？」

部屋の隅まで追いつめられたスコール。冷や汗が流れた。

「どないしてくれんの！？　リノアとはするのに、あたしとはデキないんか～～～～！！」

もはや彼女の頭からは、当初の目的はすっかり消え去ってしまっ

ていた。スコールからすれば、言われた通りにしたにも関わらず意味もなく怒られている訳なので、もちろん合点がいかないことは確かだ。
だが今、そんなことはどうだっていい。命の灯火が揺れた。
あれほど疼いていたセルフィの下腹部からは、どんどんその熱が逃げていく。今すぐにでも抱いて欲しいと切望していた彼女の頭は、今、スコールに対する修羅の如き殺意で満ち溢れていた。

「セ、セル……」
「が～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～！！」

バラムガーデンで深夜、突如発生した大爆発は、学園中の眠りを醒まし、ＳｅｅＤも出動する大惨事となった。
爆心地で発見された黒こげの生徒があのスコール＝レオンハートであると確認されるや否や、混乱は学園の隅から隅まで伝播する。

「スコールッ！！　一体誰にやられたんだ！！？」

担架で運ばれる彼に、ゼルが訊いた。

「ほのおだ。ほのおは生きている」

うわごとのように繰り返すスコール。ゼルは顔面蒼白してしまった。

「彼ほどの実力者がやられるほどの手練れが相手だッ！　総員、第二種戦闘配置！！」
「被害状況の確認を急げッ！　ガルバディアとトラビアにも応援を要請！　犯人との直上会戦に備えるッ！！」
「周囲１０ｋｍの封鎖を完了しました！　全道路に検問を設置！２０人体制の警備を固めますッ！！」
「上空からのラグナロクによる捜査を開始！　ソニックウェーブサーチシステム、オールグリーン！！」

しかし、犯人は相当なやり手だった。厳重なこの警備の盲点を突き、ＳｅｅＤの精鋭たちによる捜査の網をかいくぐる。
何と、犯人は自室に戻ってさっさと寝てしまったのだ。

犯人不明のバラムガーデン襲撃事件は、翌日の学園新聞のトップをでかでかと飾った。

「なあ、おい！　本当に何も見てないのか！？」

一週間後、リハビリに励むスコールにゼルが尋ねる。身体中を包帯でぐるぐる巻きにされ、さながらミイラだ。

「ああ」
「マジかよ。お前ほどの奴が姿を見る間もなくやられちまうなんて、相手は一体どんな化け物なんだ？」

そうだ。
確かに、あれは人間ではなかった。だが、スコールは犯人を言う訳にはいかない。
これでも彼は傷付いていた。身体だけではなく、心も。彼女をあそこまで追いつめてしまったのは、自分なのだから。多分に、彼女は深い心の傷を負ってしまったのだろう。あのとき、何故自分はその想いに応えてやらなかったのか…。
スコールは胸を押さえた。セルフィが今、恋人にも会えず、自分の気持ちを裏切られてどんな気持ちでいるのかと思うと切なくなる。

（そうだ。セルフィの心の傷に比べたら、こんな怪我くらい）
「アービ〜〜〜〜ン」

現在スコールとゼルがいるのは、ガーデンの二階。一階のエントランスホールとは吹き抜けで繋がっている。
そこを、元気に走っていく少女の姿があった。見慣れた髪型にミニスカート。走っていく先には、長身の男がニコニコしながら立っていた。

「やぁ、セフィ！」
「来てくれたんだね〜」
「もちろんさ。君が来てくれって言えば、僕は地獄に一番近い島にだって行って見せるよ〜！」
「もお！　アービンたらV」

眼が腐るようなイチャつきを披露したあと、二人は仲良く外へ行ってしまった。

もちろんしっかりと手を繋いで。

ゼルは呆れて言う。

「けっ、あいつら、相変わらずベタベタしてやがるぜ！」

「……」

ゼルの台詞の途中で、スコールの視界がブラックアウトした。何かの糸が、確かに切れた。

どさり。

「わー！　スコール～！？」

精も根も尽き果てた。

世界を救った獅子心（ライオンハート）は敗れた。

たったひとりの、ＳＥＬＦＩＳＨ　ＧＩＲＬに。

★★★the end★★★

（後書き）

リノアは里帰りしていたという設定です。私のリノア嫌いは、？発売から十年以上過ぎた今でも衰えることを知りません（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7585o/

SELFISH★GIRL

2010年11月7日03時52分発行